

## 支那古代史の一観察

重松, 俊章

<https://doi.org/10.15017/2340966>

---

出版情報 : 史淵. 19, pp.130-157, 1938-12-10. 九州帝国大学法文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## 支那古代史の一觀察

重 松 俊 章

(一)

Hegel はその世界史の哲學 (Philosophie der Welt-geschichte, II s. 375, 378, ausg. v. G. Lassen, 2aufl.) の中に於て、支那史觀を述べて左の如く云つてゐる。

『吾人は、吾人が古代に於て知つてゐたと全く同一の (支那といふ) 國家が今日吾人の眼前に何らの變化も受けずに儼然として存在してゐる事實を視る。だから支那は本來何らの歴史をも有つてゐないことになる。印度も支那も一樣に、それらの結合に依つてのみ始めて活潑なる進歩がかち得らるゝ苟の假定として、今尙世界史の圏外に立つてゐる。』

と、之は彼の考によれば、支那人の生活状態が全體から見て、その社會組織にも政治形態にも文化の性質にも、時代の變遷に伴ふて歴史的發展性が認められない。換言すれば支那の社會國家は永遠に固定凝滞して毫も之に進歩發展性が認められない。従つて之と同様の境遇に立てる印度と共に一時的の歴史

過程として今尙依然として世界史の圏外に立つて之に置き去りを喫はされてゐるこの見方に基づくものやうである。Hegel は彼が世界史の對象の中心としてゐる歐米人の生活内容が文化の發展に伴ふて絶えず歴史的に大なる變化發展を閲して來たものと考えてゐるので東洋の社會を之と比較してかゝる大膽なる意見を立てたものと思はれるが元より妥當の見解ではない。

次に Ranke も亦之と略々類似の意見を抱いてゐたやうである。彼に據れば、『世界史の觀察の對象となり得る國民は、彼等の固有の歴史的發展に由つて互に競ひ合ふと共にそれらの生活圏が相互に切合つて（交錯して）それらが終には一つの特殊な統一的の文化世界に合流して仕舞ふといふ状態にある國民のみが世界史に加入する資格を有つ』と云つてゐる。而して Ranke は東洋民族を以て永遠に礙滞せる民族（die Völker des ewigen stillstandes）即、永劫に進歩なき民族であるとなし、斯かる民族から世界史の內面的運動を把握せんとすべしとは（um die innere Bewegung der Weltgeschichte zu begreifen）到底不可能の事に屬する云ひ、結局 Hegel と同様に東洋民族は移し難い、內面的（精神的）に硬化せる集團（Unverrückbare, innerlich starre Massen）で永遠に一所に沈滞せる民族であるから世界史の生活潮流（Lebenströme der Weltgeschichte）の圏外に取殘された集團にすぎないとしてゐる。（Ranke, Weltgeschichte, Teil I, 1<sup>er</sup> Teil III, 1<sup>er</sup>, VIII, f.）

併ながら Hegel や Ranke 時代は、歐洲に於ては、未だ東洋學の研究が充分に發達せず、従て彼等には東洋文化の性質は勿論、その歴史的發展性に對する認識が全然缺けてゐた爲に斯かる根據のない謬論

が起つた譯で、今日から觀れば元より一顧にも値しない僻説といはねばならぬ。

當時之等の學者は東洋文化に對する認識を缺きたる結果、彼等は世界史の對象を希臘、羅馬系統にのみ局限するの陋風があつた。Ranke の如きはその代表的學者の一人で、彼は世界史を以て *westliches Kulturkreise* に限り *ostliches Kulturkreise* のあることを忘れてゐた。否、むしろ彼は東洋文化に對して全面的にその智識と理解とを缺ぎ従て東西文化を一貫する歴史的原理の問題などに何等の關心を有たなかつたが爲めに東洋文化に對して *ewig stillstand* の汚名を被せて、自己の便宜からその “*Waltges-chichte*” 中から東洋文化の本質的役割やそれに對する正當なる評價をも殊更に忌避した嫌がありはしないか。果して然りとせば Ranke の爲めに洵に惜みても尙餘りある事柄といはねばならぬ。

併ながら Hegel や Ranke の如く從來の西洋學者が支那の國家・社會を目して永遠に固定凝滞して何らの進歩も發展もなしものとするには自から一つの理由があるやうに思はれる。即彼等舊時の西洋學者の支那に對する智識は概ね明清時代の *Jesuites* 教師などの支那儒教に關する記録やその翻譯經典などに由つて獲得したものが多く、之等の儒教の經典に現はれた支那の國家社會に對する觀念なるものは概ね春秋戰國時代に發生して漢代に整理完成せられたもので、今日から見れば、殆ど二千年の長年月を閱みしてゐる。降つて宋代に至つて程朱の輩に由つて之等の諸經典は再吟味を受け、新解釋が施されたとは云へ、其の根本に横はる儒教の政治（國家）道徳（社會）に關する根本觀念は殆ど寸毫も變改されたわけではなく、それが元明から清末まで踏襲せられて來たものである。

儒教は春秋末期（紀元前六・五世紀）に出世した孔子に淵源を有するものであるが、孔子は當時に於ける士族階級を目標として教育學術の普遍化を圖つた代表的人物なると共に支那歴代の政權を斷絶せる士族階級の確立者でもあつた。之が即支那歴代政治家の孔子を尊んで先聖とか先師とか云つて之を崇拜した所以である。殊に支那歴代の帝王は王權（實際上、士大夫階級の統治權を代表せるもの）の絶對不可侵權を認容する儒教の政治思想や國家觀念を利用して漢の武帝以來之を以て國民思想統一の工具となし、此の主義に基いて國民に對しては個人の自由を束縛し、民衆の利益を無視して、貴賤有差。貧富有等などと云つて官民貧富の間に一種の階級的身分安住説を教え、一般民衆に對しては専ら勤勞の美德と服從の義務とを強調してゐた。斯くて支那は漢代に至り、先秦時代の貴族階級統治の封建制度が崩れて、士族階級統治の一新形態が之に代つたが此の新たな制度機構は漢代の昔から清末に至るまで當時に成立した儒教經典に基いて殆ど不變的に繼續されてゐて、庶民階級の實際生活やその社會の進展とは事實上游離交渉の状態におかれてゐた。

されば古來支那の社會は幾多の變遷發達を経て時と共に次第に複雑化し實際上内面的には漢代の昔に比べて破天荒の進歩發展を遂げてゐるにも係らず、表面に現はれた（儒典に基づく）政治思想や國家觀念は漢代以來少しの進歩も發展も認められず硬化沈滯の儘に残される傾向があつたのでかゝる事態の一面のみから觀察して支那の國家社會を目して永遠に進歩發展のない *ewig stillstand* のものがあるといふ誤解を西洋學者に與ふる充分の理由があつたのである。

註 かゝる點からして支那の社會やその民族性が矛盾撞着に充ちてゐるといふ感を西洋學者に與へた一つの動機となつてゐるのではないだらうか。アンドレー・ヂュボスクの言に、

La chine est "le pays des contraires conciliés." Quand vous en avez saisi un certain caractère, vous n'êtes jamais sûr de n'y point découvrir demain le caractère opposé; d'où le mot fameux: "One can never tell truth about china without telling a lie at the same time." (André Duboscq, Préface de "La chine," par George Maspero, vol. I.)

といふのがあるが、吾々東洋人から見ると何でもなく了解の出来る事柄でも彼等西洋人の思考・推理の方面からすればそれが不可解に終る點が少くないらしい。其處に世界文明に貢獻する處の東洋文化の特殊性と優越性がある譯だ。

## (二)

Hegel や Ranke の考と相反して漢族の社會國家は少くとも過去四千餘年間に極めて遅々たりといへ絶えざる進化の歷程を繰返して世界文明史上に偉大なる寄與貢獻をなしてゐる。

伏羲、神農、黃帝の神話傳説時代は別として抑々漢族が黃河流域の舊支那 (old china) に牧耕生活を營み始めた西紀前二千有餘年の昔から彼等は種族の競争と混合同化とに依て一時代を経る毎に着々として内外兩方面の發達進歩を遂げてそれが世界文化の重要部門を構成してをる。

漢族が今より約四千年の遠古に黃河流域に據て半農半牧の生活を營み始めたと思はるゝ當時は彼等の間は幾多の部族に分れて對立抗爭してゐたやうである。其中歴史上で知られた最大のものゝは夏朝(唐虞を

此の中に含める)に依て代表せらるゝ山西西南部の河東族と商朝に依て代表せらるゝ河南東北部の河内族と之に次いで興つた周族に依て代表せらるゝ涇・渭流域(陝西)の關中族の三大部族に分つことが出来る。而して之等漢族の周圍には又東北(熱河・河北)には山戎、北方(山西察哈爾)には獫狁、東南方(山東・江蘇)には淮夷・徐夷、南方(揚子江流域及びその以南)には荆蠻などいへる異種族が盤據してゐた。

當時黃河流域の之等の漢族社會は史家に因て中夏又は諸夏と呼ばれてゐるが、之等は同一血族の自覺に基づく共同の祭祀團體が一定の邑土に據て部落生活を營み、一人の部長(又は族長)を中心とする幾多の氏族國家(その根據地は多くは丘陵に位するが故に古史には帝丘・夏丘・商丘などの名稱が遺つてゐる)から成立し、その部族の長は族人の統治と祭祀(祭主)との兩權を併有して經濟的には原始共產制度(耕地牧場を族人が共同に經營して其の收益を部族の共有とする。此際祭祀の費用として部族の長に捧ぐる供物が後世の租税の起源を爲す)が實行されてゐたやうである。太古の世にはかゝる同一血族の共同祭祀團體から成る漢族部落は獨、河東の夏族や河内の商族や關中の周族に限らず當時黃河下流域のみについて見るもその數は恐らく數百の多きに上り、夫々固有の姓を有して自他區別の標幟としてゐた。古史に百姓の文字あるは之等多數の漢族部落を總稱せるものである。

註 今日古史の上に遣れる著姓としては風姓(伏羲)、姜姓(神農)、姬姓(黃帝及堯)、媯姓(一に姚姓ともいふ處の舜)、姒姓(夏)、子姓(商)、姫姓(周)、嬴姓(秦)、辛姓(楚)などが其の主なるものである。而して古代の姓が多く女に従つ

てゐるのは支那の太古に母系制の行はれた名残であらうとする學者もある。

而して之等各姓部長の主宰する祭祀の對象は天神と祖靈とで後世の支那帝王が國家最大の年中行事として行ふ祖先を天（皇天上帝）に配祀するのは遠くその淵源を此處に發してをる。殊に各部落ではその共同の祖先に對して絶大の畏敬と信仰とを有し、その祭祀は全部落の一大行事として最も神聖嚴肅裡に執行されてゐた様である。世運の進歩と共に氏族制が分解して家族制となるが、後に發達した支那家族制度の根柢に横はれる漢族の祖先崇拜や祖靈アノミタ畏敬の宗教的觀念は既に此の時代に由來淵源を有するもので、父母に對する孝道が漢族の主徳となつた所以も元々此の道徳が祖靈アノミタ崇拜に基礎を有するが故で、族長や家長は各々祭祀權を統べて事實上共同の祖先を代表する者であるから子孫子弟は之に孝道を盡すの義務があつた。然るに氏族制の瓦解と共に族長に對する道徳は家族制度時代には一轉して父母家長に對する主徳となつたもので、父母家長は祖先及びその靈魂を代表せる者なるが故に孝道は殆ど神聖不可侵の宗教的意義を有つ道徳として後世の支那社會で嚴守されるやうになつた者である。（之も復古主義の儒家の徒が孝經などを製作して之を強調鼓吹し、歴代の政治的權力や社會的統制に由て一般國民に強要した爲め、社會が進化し、家族制度が個人主義に瓦解して實際上かゝる道徳が社會生活上さして重きを爲さぬ時代となつても依然支那の社會では惰力的に之が根強い力を有つやうになつたものではなからうか）。儲かゝる共同の祭祀團體たる漢族の同姓部落の人口が次第に膨脹繁殖することになると此に部族の分裂作用が起り、一姓の部落から幾多の支族が岐かれ、之等の各々にそれ／＼特殊の名稱が與えらる

ゝことになつて來る。之が氏の起源で一姓から數十百氏が分岐し、更に進んでは此等の氏から數多の族が分岐することになるのである。斯くて

漢族部落（諸夏）……姓↓氏↓族↓家↓個人

といふ具合に部落が分化して行つたものであらう。而して之等の諸夏（中夏）と稱する黃河流域の漢族部落の總合體から中國といふ支那人の國家が發展して來たものと考ええる。

次に彼等の國家發生の過程を觀るに一姓一部落の發展に伴ふて當然領土の開拓とか他部落の併呑とかいふことが行はれる。かくして或一姓一部落の急激なる發展に伴ふて幹支兩族の關係が次第に疏遠になる傾向を生ずる。殊に征服に依て其の團體の中に多數の異姓や他部族を包括することになると同一血族同一祭祀團といふ觀念が次第に稀薄化して來る。換言すれば同一血族といふ自覺に依る求心力（Centripetence）が弛んで來る。つまり外延（Extension）が擴大するに伴ふて内包（Intension）が之に比例して減縮するといふ論理學的法則が此にも働いて來ることになる。仍てかゝる團體はいつしか血族中心の考を棄て、彼等の占領したる土地を中心として結合せんとする傾向を生ずる。換言すれば血族團體が次第に崩壊して之に代つて地域團體の發生を促すことになる。此に於てか同一血族から成る『人』を中心とせる邑土的氏族國家は次第に『土地』を中心とする比較的廣汎にして内容の複雑なる封建國家に推移することになるのである。而してかゝる推移の重大なる原因の一は云ふまでもなく彼等の經濟生活の發展に本づくものである。氏族國家時代は各部族の有する土地牧場も狭く、被征服者たる奴隸の外は概ね

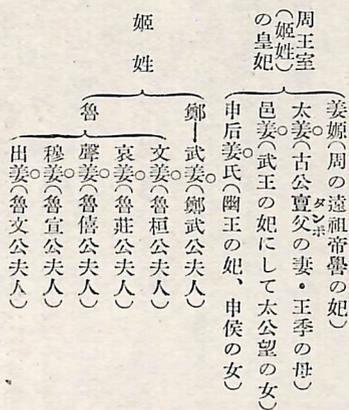
同姓の部民を中心とせる比較的小規模の團體に過ぎなかつたものが、封建國家の構成要素は異姓他族の部民が大部分を占めることになるからそれら大集團の生活を維持せんが爲には勢廣大なる土地の占有利用が必要になるので此に必然的に狩獵や牧畜の如き原始素朴な小規模の生産形態から一轉して規模組織共に一段進んだ農業生産の時代に移り行き、同時に又内容の複雑した團體を統御する爲めに必然的に比較的組織立つた國家統治の制度法律が生れ來りて此に始めて法治國家の態形が成立するのである。支那史上でかゝる時代を求むるならば恐らく商（殷）末から周初にかけて西紀前十世紀の後半頃とならう（現行年表が前十二世紀末に周初を置くは誤である）。從て之より以前の時代は政治上には部落國家時代で夏といひ商といふも僅に河東や河内の一部に跼蹐してその周邊の若干部落を併合した地方的の一小勢力に過ぎず尙書の禹貢に見えた様な廣範圍に亘る一大國家とは到底認め難い。

從來舊派の支那史家や漢學者流は周初を以て支那に於ける一大統一の封建國家成立の時代となし其の領土は少くとも河江の全土に亘り、諸侯を之等の各地に分封して王室の藩屏となし、周禮と稱する立派な制度を創めて後世支那に國家統治の模範を垂れたやうに考へてゐるのであるが、之等はいづれも漢代の儒者が机上で捏ね上げ、彼等の腦裡に描いてゐた架空の國家形態で假令かゝる机上國家の Régime が後世の支那政治思想に與へた偉大なる影響は之を認めない譯にゆかないとしても、それは單に *Sollen* が *Sein* を支配したといふ一種の變態的現象であつて到底歴史上の事實として認容することは出来ない。

現に尙書・春秋經傳、國語を始め國策・史記などに見るも周初の封建制度と稱するものは實質上夏商

時代の氏族國家の一族分置分建の制度と何ら擇ぶ處はなく、西洋中世紀や我が國近世期の封建制度とは實に雲泥の相違があることを注意せねばならぬ。史記や左傳の記す處によると周初の封建諸侯は管(叔鮮)・蔡(叔度)・曹(叔振鐸)・霍(叔處)・成(武)・魯(周公伯禽)・畢(叔高)・燕(叔奭)・衛(庚叔)・晉(唐叔虞)・冉(叔季載)などの同姓の外は僅に齊(太公望呂尙・姜姓)・杞(夏後・東婁公)・陳(媯舜後・胡公)・商(微啓)の四姓に過ぎず、當時の封建諸侯は殆ど周の同姓がその大部分を占め、異姓としては周初の功臣にして歷代その外戚たる姜姓の太公望呂尙の外は前朝の虞舜・夏・商の僅に三内家に過ぎないことになつてゐる。

註 當時に於ける周王朝の姬姓の外戚は概ね太公望の同族姜姓から出てゐること、尙我が國平安朝の皇室と藤原氏との關係に彷彿してゐる即ち、



即、之に據ると周武王が太公望を始めて齊に封建したと傳ふるも事實は彼太公望は既に遠祖以來山東に據つて齊を領有して居り、周の勃興以前から周と外戚關係に立つてゐた跟跡が認めらるゝから、或は周武王の黃河流域の諸夏の統一時代には之と協力して東西兩方面から周と聯合して商朝を滅ぼしたといふ形跡が見らるゝ。

斯様に見來る時は周初の封建制度なるものは、その地域も僅に黃河下流域の河南・山東・山西のそれく一部と渭水（黃河支流）流域の陝西の一部だけに限られ、その分封の諸侯の如きも前代の地方的統一勢力たる虞・夏・商などの外は殆ど同族を以て占められてゐたやうである。（召公叔夷の封地は北燕即今の河北省の北部北京天津などを中心とせる地域ではなく、事實は河北省南部の南燕であつたらしいが、之とても歴史的にはその眞偽の程が判然しない。）斯の如く見來ると支那の封建制度の統一國家が周初に始まることの舊説は一大修正を必要とする。即周初の封建制なるものは夏商の氏族制時代の支族分建の制度と次代の純封建制度との中間・過渡的の Régime に過ぎない。換言すればそれは血族的氏族國家と地域的封建的國家との過渡期に屬するものと見て差支ない。

併しながら此の時代までに黃河流域の漢族團體たる諸夏の諸部族は大體に於て周族といふ一大勢力に統一されて之から進んで周圍の異族の併呑同化にまで伸展するといふ形勢に進んでゐた。だから之を以て漢族の第一期の發展時代（漢族結成時代）と見て差支なからう。

以上述べる處に依て見ると謂ゆる諸夏若くは中夏と呼ばれた黄河流域の漢族の中にも夏族（河東族）  
商族（河内族）周族（關中族）等々各々其の起源や發祥を異にし従て亦多少その系統を異にせる多數  
の漢族が群立してそれらが次々に夏商周の諸族によつて併合統一せられ融合同化を経たもので而もその  
過程は回を経る毎に（夏より商、商より周へ）より、大規模に行はれたものらしい。されば之等の漢族  
は少くとも西周初期（前十世紀後半）に到るまでには幾多異性諸部落の併合同化に由て相當範圍も廣く  
内容も複雑した歴史的民族を形成してゐたものである。而して之等の漢族は周初に自己種族（諸夏）の  
包合統一が略々緒に就くと共に更に周圍の蠻夷戎狄の經略に着手し始め西紀前八世紀半頃（即春秋時代  
の初頃）から次第に山東の漢族（齊）は東夷を作せ、山西・河北のそれ（晋・燕）は北狄を併合し、陝  
西（秦）のものは西戎を平げ、その他河南の漢族（鄭・陳等）も亦夫々其の境上の夷狄を征服して此に  
漢族は更に益々外部的に膨脹發展すると共に、内部的要素も次第に複雑の度を増し來り、その結果、彼  
等漢族の社會は内外物心の兩方面に亘つて全面的に前代に比して格段の進展を遂げたことは申すまでも  
ない。

註 (1)之は優生學 (Eugenics) 上から見ても異姓との結合が同姓との結合に優る如く一民族は多くの他の民族との  
雜婚同化に因て益々内部的に複雑化し、それ丈けに全般的に進化するものである。概して異民族との接觸の機會  
に恵まれた大陸の民族が孤立的な島嶼民族に比べて開化の程度が迅速で高度であるのはかゝる原因に基くものと  
思はれる。但他民族との接觸結合を屢々繰返してゐると其の民族に固有の Nationalität を喪失する懼がある。  
之は外延 (Extension) は内包 (Intension) に反比例するが爲めである。

註 (一)左傳に散見する春秋時代の漢族の周圍やその境上に據れる異民族は大體下の如くである。

- 河南
  - (1) 戎蠻 (河南汝縣)
  - (2) 陸渾 (河內嵩縣)
  - (3) 茅戎 (河南陝縣)
- 河北
  - (4) 鮮虞 (河北正定縣)
  - (5) 無終 (河北玉田縣)
  - (6) 山戎 (河北盧龍縣)
  - (7) 鼓戎 (河北晉縣)
  - (8) 赤戎 (山西潞城縣)
  - (9) 肥戎 (山西昔陽縣。河北盧龍縣。山東肥城縣)
  - (10) 北狄 (秦哈爾蔚縣。舊山西蔚州)
- 山東
  - (11) 戎狄 (山東曹縣)
  - (12) 鄆騶 (山東濟南境)
  - (13) 麗戎 (陝西臨潼縣)
- 陝西
  - (14) 大戎 (陝西鳳翔縣)
  - (15) 白狄 (陝西膚施縣)
- 江蘇
  - (16) 淮夷・徐夷 (江蘇・徐・邳兩縣)
- 湖北
  - (17) 廬戎 (湖北襄陽縣)
- 湖南
  - (18) 百濮 (湖南沅陵縣)

春秋約二百五十年間は一言にして掩ふへば諸夏の漢族が之等周圍の夷狄を併呑融合した時代といひ得る。而して之等異族との融合には併呑攻略の外に夏夷の雜婚が偉大な効果を有つてゐる。

註 今其の夏夷雜婚の著例を擧げる。

王	侯	妻	妾	生	子
晋	献公	大戎狐姬(姉) 小戎子(妹) 驪姬(姉) 小驪姬(妹) 齊姜(父武公妾)		文公重耳 惠公夷吾 奚齊 卓子申生 太子申生 秦穆公夫人	
晋	文公	魏姬(妹)		叔	劉
趙	襄	魏姬(姉)		趙	盾
周	幽王	申后(戎狄申侯女)		周	平王
周	襄王	魏后(翟女)			
代	王(狄)	趙女(趙簡子女)			

上注は僅に左氏國語などに散見したる著名なる二三の例に過ぎないが、此の外、當時の書記に洩れたる貴賤上下の雜婚の例は恐らく吾人の想像の外であらう。

斯様に春秋時代の諸夏の漢族は周の封建制度下に幾多の諸侯封君に分れて互に抗爭侵伐を事とし乍ら同時に周圍の異族を併呑同化して前代よりも彼等の社會は内外兩方面に於て一段の飛躍的進歩を遂げた。

さて斯の如く黃河流域の漢族の集團（諸夏）が周族を中心とする封建制度下に一つの統一國家の體裁を爲して周圍異民族の併呑融合に努めてゐる間に、一方南方揚子江流域に於ては荆蠻即ち荆楚族が勃興して大江の流域を統一化して固有の文化圈を形成し北方諸夏の漢族と對立抗争することになつた。支那史上の春秋時代は漢族が内部的には周圍境上の異民族を併合同化すると共に對外的には南方荆楚族と對抗競争に没頭した時代で、覇者の最重要の使命は一に南方荆楚族に對する北方漢族文化圈（諸夏）を防衛することにあつたといふも過言ではない。

從來舊派の支那史家は春秋時代の十二若くは十四列強中（前者は漢族諸侯に楚を加へ、後者は之に吳・越を加える）南方民族を以て諸夏と同じく周朝の統制下に立てる封建諸侯と見てゐるのであるが之は當時周朝（從て漢族）の勢力の強大なることを誇張せんとする支那古代史家の謬見に誤られたもので取るに足らない妄見である。

氏族制から發展し來つた周の封建制度は東西周の交替期（前八世紀前半）の頃に略々其の基礎が築き上げられたものであるが、春秋中期以後になると周の封建下に立てる諸侯の國力が次第に發展して終に周王朝は尾大不掉の形勢を呈し此に覇政の勃興を促した。それは周王朝の勢力が諸夏の諸侯の間に徹底しなかつたが爲めに勢、強大なる諸侯（覇者）が王命を藉りて群侯を糾合して内は相互の侵略を戒め、外は夷狄の來寇に備え諸夏の結束と統一と防衛とを圖つたものに外ならぬ。然るに覇者は獨、黃河流域の諸夏の諸族の範圍内に限られて當時周朝の封建制度の圈外に立てる揚子江流域の荆蠻族には及ばな

つたものである。春秋時代の支那政界の形勢を通觀するに黃河流域の漢族は揚子江流域の荆蠻族と對立抗爭の勢を呈して、前者は名義上周室を王に戴ける北方の諸夏を糾合統率せる齊・晉諸國の覇者が之を代表し、後者は南方の諸蠻族を統一せる荆楚が之を代表して南北互にその雄長を争ふてゐた時代である。

南方楚の歴史は史記を始め國語・春秋左傳などに散見し、就中史記には楚の祖先の發源から説き起し又春秋經傳には周莊王十三年（西紀前六八四）から説き出し、國語には楚莊王（西紀前一三—五九一）から説き始めてゐるが、史記には楚の祖先を帝顓頊セツキョクから出で、周成王から諸侯に封ぜられたなど云ふことを記してゐる。之は吳の祖先が太伯虞仲（周文王叔父）から出たとか、越の遠祖が夏禹王の支孫少康から出たなどといふことゝ類を同じくせるもので殆ど信用に値しない。

楚の歴史中で稍々信用の出来るものは周夷王（武王より九代目。前九世紀後半か）の時代に熊渠が丹陽（湖北歸縣）に據つて王號を取り近鄰の諸部を併せ北方の周朝に對抗して荆・鄂の地（今の江陵から、武漢に至る地方）に覇を倡へたことに始まる。熊渠八代の孫熊通（武王）に至り南方百濮（湖南沅・湘流域）を平らげ、その子熊贄（文王）に至つて始めて都を郢エイ（湖北・江陵縣）に移して、北侵して河南に入り、信陽（周宣王の舅申伯の封地）に迫つて中國を滅ぼし、蔡（上蔡）袁公を虜にし、江漢間の小國は皆な之に畏怖したといはれる。斯くて北方諸夏の地では齊桓公が覇を唱へた頃（前七世紀半）には文王の子熊燾（成王）は始めて周惠王（前六七—六五二）に使を派して款を通じたが、それにも係ら

す頻に北伐の軍を進めて鄧（南陽縣）を滅ぼし許（河南許昌縣）を降し、英（安徽霍縣附近）を併はせ終に宋（河南商邱）に侵入し襄公を辱かしめ（前六三九）、次いで鄭文公（新鄭）を降し、再び宋と泓（河南柘城縣）に戦つて襄公を射て之を傷死せしめ、かくて周襄王十九年（前六三三）には魯と共同して齊を伐ち濟北の地（穀城）を奪取してをる。史記に據ると此頃齊桓公の七子が楚に亡命してゐるから楚は齊桓公の歿後（前六四三）その繼承の亂にも干渉した形跡が見える。

斯くて楚成王はその晩年三度宋を討つて却つて晋宋齊の聯合軍の爲めに城濮（山東濮縣附近）に大敗したが（前六三四）、その子穆王（商臣）が立つに及んで安徽を經略し、淮河流域の六蓼（しゅう）を平らげ、穆王の子莊王（侶、前六一三—五九一）に至ると、更に北伐軍を興して陳（河南淮陽）を滅ぼし、鄭を降し、宋に捷ち、河南嵩山の陸渾戎を亡ぼし、周の郊外を過ぎてその宰臣王孫滿に鼎の輕重を問ひ（前六〇六）、又晋と邲（河南鄭縣附近）に戦つて之を壊敗せしめ（前五九七）、終に實力の上では完全に揚子江系の荆蠻族が黄河系の諸夏族を壓倒してしまつた。

されば當時諸夏族の間に興つた覇者の重大使命は殆ど南方荆楚の侵入を防いで中原諸侯の統一と團結を圖る點に存してゐたものである。その一證とも見るべきものは齊桓公の稱覇の動機は許を援けて楚の北侵の矛を障（河南郟城縣）に破つたこと（前六五四）にあり、晋文公の覇者となり得たのも楚成王の北侵軍を城濮に擧退した（前六三四）からである。又宋襄公が中道にして覇業を挫折したのは楚成王の爲めに泓で撃破されたが爲めであつた。此の外、春秋五大戦の一に數えらるゝ邲の戦は楚莊王が晋景

公を破つたものであり、鄆陵（河南鄆陵縣、前五七五）の役は晋厲公を擊破した所であつて、いづれも中原の覇者と南方の強楚との争覇の戦であつた。

之等の點から考察すると春秋時代の最重要なる政治的特色の一は中原の諸侯が覇者を中心として相互に結合同盟して南方荆楚の侵略に當ることであつて覇者存立の主因は殆ど之に繫つてゐたものと見てよい。最も覇者に對する見解も自からその立場に依つて異なる譯である。春秋左傳や史記その他の支那古史に述ぶるが如く覇者の主責が夷狄の侵入を防ぐと共に諸夏族の傳統たる周制の回復維持にあつたものとすると南方の楚・吳・越などの如き荆蠻族を以て此の中に數ふべきものではなく、之は飽までも中原の漢族諸侯の雄長に限るべきが妥當である。併しながら春秋の覇者を以て唯單に漢族文化の防護者に限らず單に實力の最も備はつたものに過ぎないと考ふれば之に最も適當するものは北方の齊・晋諸國よりもむしろ諸夏の全勢力に拮抗して之等を壓倒せる南方の楚國を先づ第一に擧げねばならない。

次に戰國時代になつては六國（齊・燕・楚・韓・魏・趙）が南北（從）の勢力を合せて西の強秦に當らんとする謂ゆる六國の合從策と、關東の六國を列ねて秦に歸向せしめんとする強秦の連衡策（東西連結策）とが發生したが、春秋時代に南方に據れる荆楚は恰も戰國時代の西方の強秦と殆ど同一の形勢に立ち、全く獨力で列國間の權衡（Balance of Powers）を破つてゐたから、戰國時代の合從連衡（連橫）は春秋時代には全くその逆の合衡（橫）連從の形勢が南方荆楚と北方諸夏の諸侯との間に成立してゐた。換言すれば北方諸夏の諸侯は横に同盟して南の荆楚に當るか（合橫）或は彼等一同は袖を列ねて南方の

楚國に屈伏するか（連從）のいづれか一つの外交政策（從横策）が事實上行はれてゐたものである。

斯様に春秋時代には北方中原の漢族と南方強楚を中心とする荆蠻族との二大勢力が對立抗争してゐたものであるが、之が次の戰國の世になると北方諸夏の諸侯の間には次第に併呑攻略が行はれて楚を除く十一國が六國（齊・燕・秦・及び三晋）となり、之に楚を加えて七國對抗の形勢が成立した。一方南方の楚では吳・越の分立その他内亂等に因て著しく前代からの勢力を殺がれたのに反し、北方の六國諸侯は他國の併呑等に依て却て春秋時代よりも領土は増大し、國力は膨脹して、殆ど南方強楚と甲乙なきまでにその實力が發展した。此に於て春秋時代には斷然強盛を誇つて北方諸夏の諸侯を壓迫した荆楚は却て新に西方に崛起した新進の強秦に由てその位置を奪はれて他の關東の五國（齊・燕、三晋）と同列の位置に轉落し、之等の五國と協力して、西方の強秦に當らねばならぬやうになつた。

併しながら斯かる形勢の變動が起つた爲めに支那は戰國時代になると南方荆蠻族と北方漢族とが前代よりも層一層緊密な接觸交渉の道が開かれて、次第に南北支那の融合同化が進行するやうになつた事實を看過することは出来ない。

偕又春秋末から戰國時代にかけて之等南北兩地の融合同化の一大要因とし擧ぐべきは之等双方の經濟生活の發展とその交渉とである。北方漢族の社會に於ては周初から農業生産力が増大して之が牧畜に代はることになると（此の變動には多少江南荆蠻族の影響もあつたやうに思はれる）貴族階級（牧畜時代の戰士や官僚）が奴隸を使役して廣大なる土地を開墾して大量生産の實を擧げ、此に土地私有の封建制

度が生れ貴族政體が生じたが、一方鐵器の使用や灌漑法の發達進歩に伴ふて農業生産は益々増大し、之に應じて手工業の發達をも促し農産物と手工製品との交換が行はれることになつた。此の勢が時代の進むにつれて次第に發展して商業經濟が勃興し遂には都市の發達を促進することになつた。而してかゝる狀勢の進展に伴ふて自給自足の封建的生產關係は破壊せられて物資の供給を商業都市に仰がねばならぬ傾向を生じ、商民の勢力が次第に増大し農村人口が都市に流入して大都市が續々各地に發達するやうになつた。此の商業都市の發達と商民勢力の増大とは春秋末から戰國時代にかけての支那史上に於ける一大特色で、之が爲めに自由民の勢力が著しく發達して封建時代の世襲的階級制度の崩壞を促すことになつた。仍で封建貴族の勢力が漸く士族階級に移り、更に戰國末期からは此の社會的勢力は次第に庶民階級にまで移りゆくことになつた。春秋末頃から孔・老・朱・墨を始め各種の自由思想が鬱興したのは之等の士族階級の發展を意味するもので、戰國末になると庶民の間にも次第に教育智識が普及することになつて漢族社會には未曾有の思想混亂期が現出するやうになつた。諸子百家と呼ばれる各種の思想家は主として此の間に發生したもので、之は外部的には種族の混合同化により、内部的には封建制度の崩壞や社會階級の變革などにその重大原因があつたものと思はれる。

諸一方南方荆楚族の社會に於てもかゝる北方漢族文化の影響に因て長江流域に江陵（郢）・廣陵・吳・會稽等の大都市が領内各地に發達して北方の邯鄲（趙）・大梁（魏）・臨淄（齊）・陽翟（韓）などの漢族國家の大都市と江淮・江漢等の航路水運を利用して相互に通商貿易を營むやうになつた。

斯の如く春秋戰國約五百餘年間は北方漢族が南方荆蠻族と人種的にも文化的にも融合同化を遂げた時代で、支那文化の中核は概ね此の時期に完成せられたものと云ふも過言ではない。されば此の時期を以て漢族社會の第二期發展時代（南北民族融合時代）と認むることが出來よう。

## (四)

儲、上に述べた如く春秋末から戰國時代には商業都市の勃興や商民の勢力が増大して封建貴族の土地がその手に兼併せらるゝことになつたが、此の風潮に最も多く支配されたのは文化の程度が他處よりも稍々高かつた關東諸國で、之に比較すると關西の秦は稍々氣風素樸にして舊來の奴隸や小農による農業生産を本位とし、而も孝公以來兵農一致主義を固執して武力を養ひ國富を充實して關東諸國の争亂と疲弊とに乗じて終に天下を一統した。

秦が六國を併せて中國を統一するや彼等は舊來の貴族政治の弊に懲りて中央政府に權力を集中して天地一尊の絶對王權の專制政體を確立し、又一方に於ては農本主義に基づき商民を抑壓して農民の破産流亡を防ぎ、戰國以來の諸子横議の弊風を矯めて思想の統一にも力を盡した。爾來支那は二千有餘年間此の天地一尊の絶對王權の專制政治が行はれ、之に伴ふて國家公認の正統思想（秦は法家・漢以後は儒家）が確立するやうになつた。

斯の如き秦始皇の採つた國家統治の政策は全く前古未曾有の破天荒なもので後世儒家は之に對して種

々の非難を浴びせながらも歴代統治の根本的方針は實質的に見て殆ど之を變更し得ないと云つてよい。然るに惜哉始皇の秦帝國は其の基礎が充分固まらぬ中に改革政治の中心人物たる始皇が歿して後繼者に適任なき爲め六國の餘族遺臣等が改革政治に懐かない無頼の民衆を教唆して終に秦末の大亂を惹起し、つゞいて南北楚（項羽）漢（劉邦）の争となり此に再び或意味に於て形態の變つた春秋時代の南北戰爭を現出することになつた。併ながら此の秦末から漢楚の紛亂に亘る十年にも足らない（前三世紀終末の）短い期間は南北河江兩支那の混一融合に一大拍車をかけて漢初武帝（前一四〇—八七）の頃に至つて之等兩地兩域には全く一個の Solid な結合に因る民族的國家が形成さるゝことゝなつた。漢武帝は此の河江に跨かる漢族國家の力を動員して南方は東甌、閩越、南越（兩廣及び安南北部）を征服し、西南方面には蜀・西南夷（哀牢夷、永昌蠻、夜郎牂牁などいへる）四川、雲貴各省を平げ（南越の經略は秦始皇に始まる）西方は兵を大宛にまで出して西域三十六國を歸服せしめ、又北方は匈奴を破つて内蒙各地を席卷し、東北は遼東を併はせ北鮮をも討伐して此處に始めて漢郡を設置して半島の漢族植民地を内地の郡縣に準じて統治することになつた。斯かる武帝の四方の征伐の動機はもと戰國末から強大な勢力に達して屢々支那の北邊に侵寇した匈奴族の懲伐に端を發したものとされてゐるが、いづれにしてもその始めは黃河流域の一小區域から發祥した漢族が上來述べ來つたやうに黃河流域から江淮、江漢の線にと次第に發展進出して秦が六國を統一した頃には南は南越、北は河套、内蒙、東北は遼東にまでその政治的勢力を伸ばし更に漢武帝に至つて朝鮮、雲貴から中亞各地にまで版圖を擴げ、こゝに殆ど極東アジア全土に亘

る廣汎な地域に漢民族の大帝國が成立して、此の廣い版圖にその政治的文化的勢力の一大圏圓を劃する事になつたのである。之は當時西方の羅馬世界 (Pax Romana) と對立して東方に漢世界 (Pax Sinica) が出現した譯で古代に於ける農業國家發展の二大典型と見るべく、之こそ眞に文化史上、古代世界の一大偉觀といはねばならぬ。

註 (一) 楚漢 (項劉) の争亂に次いで漢初の頃になる河江流域の南北文化は顯著なる融合同化を見た。北方漢族の社會に南方文學の楚辭が輸入されてその隆昌を見たのもその一例に數へられるであらう。北方諸夏の文學の代表的ものは風雅頌三體に現はるゝ春秋時代の商 (宋) 周その他列國の詩であるが、詩經の中に獨、その詩を取遺されてゐるものは春秋列國中楚・吳・越の三國で燕は召公奭の詩中に包含されてをる。孔子が詩の采擇に當つて南方荆蠻族の夷風を嫌つて之を除外したものであるなどいふ説は後世儒家が縦に設けた架空の談で、之は春秋時代には未だ荆蠻族と漢族との接觸交渉の程度が緊密ならず、南方の詩 (楚辭) の存在が北方に知らるゝまでには至らなかつたのではないだらうか。

註

(一) 海東朝鮮方面に對する漢族の發展は古代史上では大體左の五期を経てをる。即ち、

(一) 箕氏朝鮮。戰國時代の内亂による戰禍と賦役とを避けた北方漢族の一團は當時遼東から北鮮地方に流入して平壤を中心とせる大同。清川平野に移住せるもの。

(二) 衛氏朝鮮。秦末・漢初の内地の戰禍と賦役とを避けて北鮮に大舉移住して箕氏に代れるもの、箕氏朝鮮の遺民は此の新勢力に逐はれて南方漢江平野の方面に移つたやうである。

(三) 漢四郡。漢武帝の衛氏征伐當時に大舉第三回の移民群が北鮮に流入して、その爲めに衛氏遺民は南方に驅逐せられ、箕氏遺民を更に南鮮方面へ壓迫した。

(四) 王莽時代移民。前漢末の兵禍を避けて大舉北鮮方面に移住した團體で、之が武帝時代の樂浪遺民を南方に驅逐して北鮮の故地を占領した。その結果箕氏・衛氏の漢族遺民は武帝時代の樂浪遺民の勢力に壓迫せられて次々に南鮮へ進出した。

(五) 三國時代移民。古代史上では之が最後で、三國時代の戦亂兵禍を避けて遼東・北鮮方面へ漢族の大群が移民した。此の勢力に推されて前四回の漢族遺民が次々に中・南鮮各地に押出されることゝなつた。

此の結果は韓半島全土に漢文化が普及し引いて當時九州から南鮮方面に擴がつてゐた我が往古の同胞(謂ゆる倭人)の生活にも影響して日本に於ける大陸文化の黎明期が開かれることになつた。

當時南鮮の三韓地方に漢文化の普及せしことは朝鮮史上で有名な新羅の六部は元北鮮から南遷した樂浪遺民の『阿殘東人』から成立したなど、傳へられてゐる點から考へても判かる様に之は南鮮の韓族と樂浪地方の漢族遺民との融合同化の事實の一端を物語るものであらう。

さて斯の如く大發展を遂げた漢族大帝國も内部の腐敗・積弊(外戚・宦官の政權爭奪や權門豪家の土地・奴婢の兼併による農民の流亡と歲入の激減)等に因て瀕死の状態に陥り、王莽の改革策も徒に空論に墮してその効なく、遂に前漢末の大動亂となり、南陽の匪賊群中から出た劉秀の統一となつて、後漢二百年の社稷が確立した。光武(劉秀)の新政も戰亂後の貴族豪家の没落減少による自然的調節を利用して權門豪族の土地や奴婢の兼併の弊風を幾分緩和調整すると共に賑恤や減税に依て幾分農民の負擔を軽減してそれに自力更生の機會を與ふるといふ頗る微溫糊塗的の改革に過ぎなかつた。されど光武は之に依て辛じて前漢末の積弱を救ひ後漢前期約百餘年の國威を維持すると共に西域方面にも國力を伸ばして印度や中亞各地との接觸交渉を確保し、終に佛教文化の東漸を促進した。併ながら此の帝國も亦その後半期に這入ると永年の太平に狎れ内外兩方面から奢侈荒怠の弊風が助長せられ、前漢末期と同じやうに宮廷生活の奢濫や外戚宦官の政權爭奪に次ぐに清(名節の士)濁(宦官)兩派の黨争が紛起續出して遂に政治の腐敗と社會の不安とに乗じて黃巾教匪の蜂起を促すやうになつた。然るに之が討伐に従

事する地方長官（州牧及郡守）に強大なる兵馬財政の權を假したから、其の爲め中央集權制が崩れて權力が地方に移り、幸にして當の黃巾匪亂を鎮定することは出來たが、之が爲めに群雄割據の形勢を誘致して後漢の天下は之等群雄の對立抗争の舞台と化して、終に Pax Sinica の中心たる後漢帝國は脆くも土崩瓦解の一跡を辿つて亡んでしまつた。

併ながら此の前後漢約四百餘年の間に、漢民族は未曾有の大帝國を建設して人種的にも思想的にも周圍の多數の異民族と一大混合同化を経験し、先秦時代の民族的國家から一躍して世界的國家にまで發展したるが爲に彼等の社會は前代に比較して著しく複雑多岐なる進化發展を遂ぐるこゝなつた。先づ社會的方面に於ては封建制度時代の世襲的階級制が完全に亡んで新に之に代つて權門豪族が土地資本や勞働資本（奴婢）を兼併獨占することゝなり、それに伴ふて之等の階級の勢力が漸く政治上に反映して後には官僚はその代辯者代理者に過ぎないやうになつた（王莽の改革失敗は此の階級の反對に遇つた爲めであり、光武の革命の成功は之等の階級を懷柔したが爲めであるといふものもある）。

次に思想の方面を顧るに、春秋末から戰國時代にかけて未曾有の發展を遂げ、孔老楊墨を始め諸子百家に因て起された漢族の國民思想勃興の趨勢は秦火や楚漢の兵亂に由て蕩然として之等が一時地を拂ふやうになり、漢初に一時文藝復興、古書復原の運動も起つたが漢武帝が儒學を以て官吏を取り、之を以て國民思想を統一するに及んで、爾後儒學が獨り榮へて先秦諸子の學は惜いかな没落の一路を辿るやうになつた。斯くて儒學は六經に各自専門の博士が出來てその學統を繼承したが彼等は徒に門戸を立て、

排他を事とし、加之徒に末節に走り、經典の訓話注釋にのみ没頭して自由思想の發展進歩を阻害したから、儒教の思想そのものさへも沈滞梗化して實質的には前代よりも退歩の觀があつた。併しながら漢武が儒教を以て國民の政治文教の基準としてから政治的には士族階級の官僚政治が勃興し、社會的には儒教の倫理道德が漢族の思想・行爲を拘束支配するやうになつた。斯くして之は一面に於ては漢族文化の一大特色として其の大帝國の結合の連鎖となつてゐたと共に、又他方に於ては漢族の自由思想の發達を阻害し社會生活の進展を拘束した點も尠少ではなかつた。

以上は儒教についてであるが、更に此の時期には民族生活の充實に伴ふて國民的宗教の發生を促すことになつた。それは從來から社會の一部に行はれた仙道（不老長生）と鬼道（巫祝・禁厭）神道（祭天・占星）などを雜糅せる混成宗門（Syncretism）の五斗米道（天師道）若くは太平道など稱するものゝ發生である（于吉・宮崇・張陵・張衡・張魯・張角・張修などはその最有力な主倡宣傳者）。之が後に老莊思想を背景として南北朝時代には遂に道教にまで發展した。

之と共に漢代にはその前期の頃から既に中亞や印度・波斯方面との交通が開けてゐたが、前後兩漢の交期に當り、西北印度や吐火羅方面に據つてゐた大月氏王國などから佛教が輸入せられ、それが次第に漢族の信仰生活に喰込むことになつた。佛教は其の始め、主として支那に於ける西域諸胡を教化する目的でその本國から宣教師が派遣されたものゝやうであるが、之等の者が支那の社會生活に伴ふて次第に不老長生の方術を説ける當時の道家に假冒して漢族の間に布教を開始し、終に楚王英（後漢光

武帝の庶子)や桓帝などの信仰を博し、漢末から三國時代になると安世高・安玄・支謙・支識・康僧會・康孟祥・竺佛朔などの高僧禪學が安息・月氏・康居・天竺などから續々渡來して姑臧・長安・洛陽・臨淮・彭城・廣陵などの南北大都市に布教宣傳したる結果、遂に竺融の造立浮圖(彭城附近)や南陽の張少安や南海の子碧などの譯經勸進の學なども行はれた。

註 竺融の事は後漢書陶謙傳・吳志・劉繇傳を参照すべく、張少安・子碧等の事は梁沙門僧佑・出三藏記集卷七參照佛者の傳によると三國時代には竺融の外に吳王孫權・孫皓なども佛教に改宗したることになつてゐる。

以上之を要約するに、秦より前後漢に亘る約四百餘年間は漢民族の第三次の發展期として政治的には前古未曾有の大版圖の上に爾後二千有餘年間打つゞいた絶對王權の專制的官僚政治を完成し、文化的には始めて印度・波斯・中央アジアの文化と接觸交渉して、支那文化の内容に新なる西方要素を吹き込んだ極めて重要な時代であつた。

次に來る第四期の六朝時代に下がるとその態勢は更に一大變化を來し、政治的には第三期時代の漢族大帝國(Han-welt, Pax Sinica od. Hannica)が異族の大舉侵入に依て土崩瓦解を起し、その爲めに漢族諸夏の故郷(舊支那、黃河流域)を逐はれて江南(新支那)に移り、其處で新に吸收同化せる西方文化(南北海陸上よりする)に因て一層國民の生活内容を充實豊富にしてやがて中世々界の一大特色たる宗教文化の絢爛期を現出することになるのである。

以上、余輩の支那古代史概觀を要約表示すると大體下の如くなる。

支那古代史

(大約前二〇〇〇年—後二〇〇年)

(一) 夏・商・周時代(漢民族結成時代)

(二) 春秋・戰國時代(河江兩民族融合同化時代) || 民族國家成立時代

(三) 秦・兩漢時代(周圍民族併合時代) || 漢族の世界帝國成立時代

(右は某地の講習會の原稿にして元より尊門學者の參考に資すべきものではないが雞助の感あつて此に掲ぐ。)

(昭和十三年十月末日)